

# 児童文学の動向雑感

酒 井 朝 彦



自然界はいま、みずみずしい青葉につつまれています。庭すみにおいてある一鉢の高山植物ツガザクラにも、かれんな白い花がさきました。私は、郷里の信濃へゆくと、よく高山植物を幾株か採って持ちかえるのですが、それが根を下ろし花をつけるということはめつたにありません。よしそれが根づいたと思えば、化けたほど背丈がのび、あの高山にあったときのすがたとは似てもつかぬものとなって、なんの風情もたぬ、つまらない野の雑草となってしまうのです。つまり、これというのも、自然環境の変化がこれらの植物に微妙の影響をもたらすのでしよう。はげしい風雪の中で、わずかばかりの岩山の間の砂土に根を張りながら、清澄な紫外線をうけて、長い歳月をかけ、ようやく育つのが、この高山植物なのです。

私は、ツガザクラの小さな花、この世のものとも思われぬは

どの清らかな花を凝視しながら、ふと、文学のことに思いを寄せてみたのです。やはり文学もこの自然界のもつきびしい摂理と同じいものではなからうか——。小説にしてもカミュやフォークナーを移植してみても、そこにどんな純美な花がさくのでしょうか。それは児童文学の世界においてもあてはまることで、ケストナーにしろ、ロフティングにしろ、それらの作家にはそれぞれの作品を創造するのに必然的な土壌、すなわち思想と生活が賦与されていればこそおのずと文学の花がさいたわけである。このことはきわめて単純なようであって単純ではないのであります。

さて、「日本の児童文学の動向」についてかたてくれとのことで、私はその動向ということばを広辞苑をひいてみると「心のうごき。個人または団体の行動の傾向。うごき。」としてあります。ですから私はここではその「個人」の文学行動についてかた

つてみようと思うのですが、それとともに「心のうごき」ということをもとり入れて、私感をのべておくこととします。

ちかごろ、児童文学の動きは表面上たいへん活発でにぎやかなようです。いつも不振不振といわれていますけれど。大学にも児童文学の講座を設けているところもちょいちょいあれば、卒論にも児童文学をやる学生も年々ふえてきています。それから同人雑誌にいたってはじつに多く、それこそ雨後の竹の子といってもいいほど多く出ています。しかし、月々寄贈をうけているものにざっと目を通してみるのですが、さてその中にちゃんとした読みごたえのあるものを、ときかれましたこれはまた寥々たるものです。というのは、つまりはその雑誌に根をしっかりと下ろしているのちがけでやっている人がきわめてすくない、ということに帰するわけですが。それにはなんといっても、素質というものがものを言います。ほかのこととちがって文学とか芸術とかいうものは素質がものを言います。どんなに上手のように見えてもそれがほんものではないかぎり、すぐ見破られてしまいます。つくりものはつくりもので、ただそれだけのものです。素質のよさのある人が不断の精進努力を積みかさねてこそ、はじめてその素質が光りをはなってくるのです。それはぴかぴか光らなくとも底光りが出てきます。そんな作家を見つけるのはうれしいことだし、また私はつねに期待しているのです。

信濃には「とうげの旗」という雑誌が出ていて、そこに集まっ

ている若い人たちはもうながいことじみちな勉強をやっています。その中には、あの「ゲンと不動明王」の宮口しづえ、「つるの声」の加藤明治、「二羽の白鳥」をかいた塚田正公、「あんずの花と牛車」の高橋忠治など、それぞれに地方作家として独自の素質と個性を持った人たちです。これらの人たちは信濃にいて生活しているのですが、中央に出てきてもちゃんと作家としてやってゆける人だと私は信じています。しかし、なかなか出てきません。それがまたいいところです。それから奈良にも「近畿児童文化」という雑誌が出ています。この城からは昨年未明賞の奨励賞をうけた「かたすみの満月」の花岡大学が出て、同人たちのために必死な努力をかたむけています。いまにまた頭をもたげる人が現われることでしょう。また女性のみの集まりの雑誌「だ・かぼ」があります。これはいかにも女の人の雑誌らしく純真で美しく、「少年の海」の吉田とし、「ちびっこカムのぼうけん」の神沢利子などがいて、それぞれに意欲あり素質ある作品を示してくれました。

つきに、これはもう大部分、既成作家のグループから出している「トナカイ村」という雑誌があります。山本和夫が主宰しているようなものですが、斉藤了一の「荒野の魂」はなかなか重厚な異色ある作品でした。いま連載中の「アリシアルと四つの窓」の宇山次雄にも私は期待をかけています。それからこれも同人雑誌とみてもよい日本童話会の「童話」ですが、これに打ちこんでい

る後藤橋根の献身的努力には敬意をあらわすにはいられません。後藤君は作家として一つの風格をもっているが、自身ではあまりかかないで、もっぱらそのエネルギーを後進の人びとのために傾倒しているようです。ここから「第二の誕生」の有本治郎、いま連載中の「浦島太郎」の森宜子、「牛乳列車」の中村ときを、「タロウのバケツ」の渡辺桂子、それから詩集「光と風の物語」の長尾勝昭と多士済々です。

それからこれは同人誌ではありませんが、日本児童文学者協会の機関誌「日本児童文学」があります。この協会のめざす児童文学の民主化とその文学の創造ということから、この雑誌は今のところ日本で唯一の児童文学の総合誌の役目を帯びていて、評論、詩、童話、小説、劇にいたるあらゆる児童文学をとり入れて、協会会員の創作を主とし、ときに協会員外からの寄稿もうけていますが、民主精神をふんまえた作品ならばその傾向は自由であります。しかし誌歴のながい割合に、なかなかこれといって問題になる作品が出てこないところに、いろいろ考えさせられる問題があるわけです。それはいったいどういう理由なのでしょう。会の機関誌という性格が影響しているのでしょうか。それともこの雑誌に書くということが、なにか作者に意識を感じさせて、淡々として書くことができないのであろうか。いや、そうばかりともいわれない。原稿料の出ないものに精魂を打ちこむことができないというのなら、すべての同人雑誌みな然りであるはずなのに、前

述のいろいろな雑誌に若い人たちは死にもぐるいで書いているではないか——問題は、なかなかむづかしいのです。

では、ここで話題を転じて、毎年春になるといつも話題にのぼる文学賞のことにちょっと触れてみましょう。春は未明賞から——というとおかしいが、小川未明の誕生日なる四月七日に授賞する慣わしになっている未明文学賞は、おおえひでの「南の風の物語」が奨励賞、私の「新・信濃むかし話」が功労賞ということにきまって授賞されました。私も審査員の一人だったので選考会には欠席し、おおえひの作を奨励賞にしたいむね、電話で知らしておきました。 「南の風の物語」は短篇の連作のような形のもので、九州の海辺の素朴な生活と民話風なものを一すじの糸でつないだような、心のあたたまる作品でした。それから私の作品は、信濃の風物を背景に、むかし話の形式をもって、まったく自由に、想像をはしらせて、すべて創作創話による三十六篇の話です。選考委員は、この一巻および私の多年の児童文学の業績——ということで功労賞をおくってくれたのですが、かえりみて、いたずらに長い歳月をあるいてきただけで、なんの業績もない私、いささか面はずかしい感をいだかざるをえませんでした。が、師事した未明先生のゆかりの賞とてありがたく受けた次第です。

つづいて日本児童文学者協会賞——この審査会には私も出席しました。かねて調査委員会からおくられてきた候補作品七点を討議のすえ、いぬい・とみこの「北極のミーシカ・ムーシカ」、早

船ちよの「キューボラのある街」と古田足日の「ぬすまれた町」

の三点にしぼり、かなり長い時間をかけて討議した結果、「キューボラのある街」に授賞と決定しました。いぬい・とみこの作もなかなか力作ではありましたが、先年の「木かげの家の小人たち」にくらべ、それをしのぐ作品ということはできなく、また古田足日の作は新しいころみ、つまり実験的な意欲にみちた少年探偵風な小説で、かなり興味的ではあるが、その作品のもつ文学性の点においても足りない、という点で落ちました。ところで「キューボラのある街」は描写が切実で、あの鑄物工場の群がる街の光景、そこに生活する少年少女らの行動や気風や情緒を、克明にえがきつくしていることを評価されたのです。しかし、この作品にもいろいろな難点はあって、かなり審査は難航をつづけました。つまりこの作品の対象となる年齢層のこと、それから内容の中のある場面、映画館での描写など。それでもこれが賞と決定したことはよいことでした。やがて次の産経児童出版文化賞にもこの作が選ばれたのです。

産経賞ではこの作品のほか安藤美紀夫の「白いりす」が入賞となりました。この作品は動物の世界に人間社会の観念と愛情をうつしてみごとに動物文学とした、異色なものでありましょう。

ついでながらこの賞には「ザルテン動物文学全集」（七巻）も入っています。これを見てもうなずかれるように、児童文学が動物の世界を描き、その習性・性態を扱かうことが、児童の心理に

つよい印象と興味を与えることを思わされます。

そういうえば大田黒克彦の「山ばとクル」も動物小説です。この作者はつねに自然に親しみ、魚貝鳥獣の生態をつぶさに観察して、愛情と詩心とをもって、抒情ゆたかな少年文学を創造している人です。さきに出た「しんじゅの家」といい、こんどの作といい、なおざりに書かないすぐれた作品だと私は思っています。

おわりに私が一こと述べたいことは、とかく現下の児童文学といえは長篇に傾きがちですが、それも悪くはありませんが、作者が精神こめた純粹な短篇集の出版されることを私は切望しています。つまり、あまりに興味をそそるばかりが、真に児童のためではなく、珠玉のような、美しい詩心と愛情とをこめた、短かい童話文学の出現を、心から望みます。

児童文学の動向——私のごときものぐさで不勉強の者には、これをよくかたりつくすことは苦手のことで、なんだかとりとめもない、思いつくままをつづつてみましたが、なにかのご参考となればさいわいです。

一九六二・五・一七

「とうげの旗」信州児童文学会編 長野市県町 石坂書店発行 \*

「近畿児童文化」奈良県吉野郡大淀町佐名伝 近畿児童文化協会

「だ・かば」東京都中野区江古田一の一三三六 柳川方、だ・かばの会、

「トナカイ村」東京都調布市深大寺町三五五の一 齋藤了一方

「童話」東京都足立区上沼田町一〇六二 後藤楢根方

「日本児童文学」東京都新宿区上落合二の六五三 みかも書房発売

その他筆者が紹介したかったものに、「まんもす」（童謡詩と童画の共同

誌）東京都杉並区松庵北町一二三 鶴見方「骨の会」編 審美社発行、

「フツペ」千代田区神田神保町一ノ三 ブッペの会（童謡）

杉並区天沼一ノ八五 都築方ら・て・れの会 などもある。